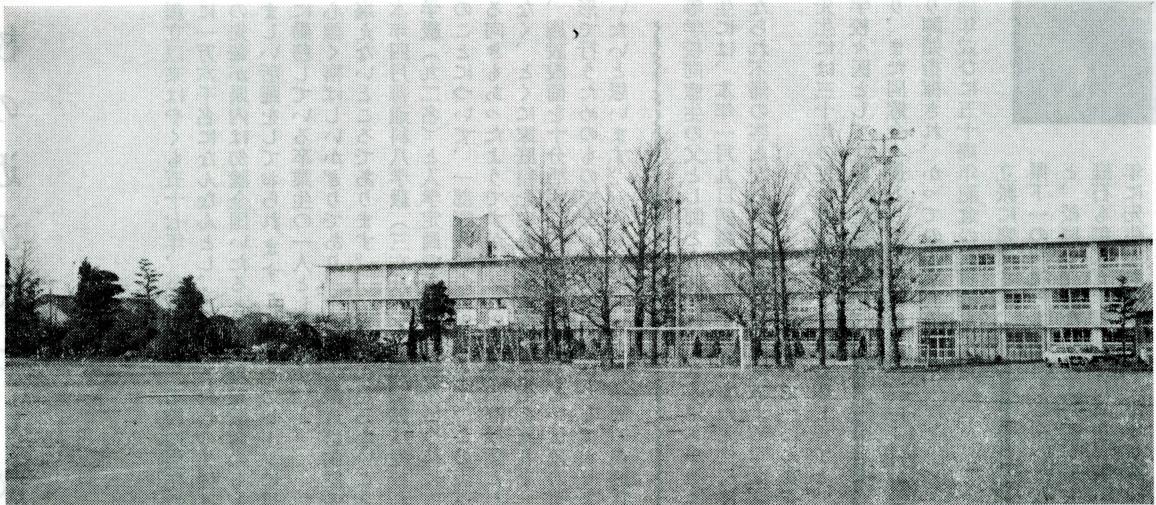


同窓会だより



武者と、朝の風流
(母校の全景)

歳月の流れは誠に速いものでございまして年内も少くなり昭和五十三年の新春を迎えてようと致しております折柄、同窓会員の皆様には、共々ご清祥にて各方面にご活躍ご精遊の由、お喜びと申上げざる次第でござります。

二年度の総会が懐しい多数の恩師のご出席を得て和気藹々の裡に映画「続本巣高校を映写致し盛大に開催されました。従来の総会とは聊か趣きを異に致しておりますことは、御婦人の方々が、多数ご出席を戴きましたことでご座いまして、年代の相違はありますが、かつて、同じ学の園を築立致しました私共は、この機会を通じて友情の輪を拡げ、かつ、友情の絆を強めつつ、懐しい思い出話は、こんこんとしてつくる愛を知らない泉の如く容易につきそうもございませんでしたが時間が経過しますので、名残りを惜しみつつ散会致しました。

總會報告

川崎重工業の加藤利一氏のご芳志により、此の一度、財團法人加藤記念奨学金が設置の運びに到り過日設立発起人会が開催されました。本校の生徒が、奨学生の恩典に浴する事ができるようになります事は、嬉ばしい次第でご座います。又、本校に、ラクビー部が創立されましてから三十年の歳月を鑑み、記念のO.B試合が新春の一月二日に、母校グランドにおいて行われ、記念パーティが岐阜県会館において開催される事に成っております。由にて、同慶の到に存する次第でご座います。

昨年十二月十八日に、名古屋支部の総会が開催され、私と八代副会長に豊田校長を初め関係の方生方と、母校の映画を携えて出席致しました。久方振りに会員の皆様のお元気なお姿に接し、共に語る機会を得ました事を嬉んでいる次第でご座ります。ご出席の皆様も、かつての青春時代に思いを馳せ母校の現状を映画を通じて眺め、感無量であつたようでご座いまして、和やかなムードの裡に盛大に開催されました。

一月には、揖斐郡の教育関係の方々の同窓会が大野町にて開催され、県の横山教育長を初め、県政界にご活躍の県議会副議長小林稀輔先生を来賓として、お迎えし八十有余名の出席者は、かつての学生時代の思い出話に花を咲かせ、又、教育関係の話で、非常に盛会裡に開催されました。

二
挨拶

八代副会長の開会の辞、井深会長挨拶、豊田学
校長挨拶のあと、野田鳳存氏を議長に議事に入つ
た。先ず、事務局より、昭和五十二年度会務報告
並びに会計報告がなされ、監事の西氏による会計
決算報告、さらに、入会金千五百円を二千四百円
に値上げする件、新年度予算案を承認、ひき続
き、昭和五十二年度事業計画、同窓会組織の強化
についての議事、創立五十周年記念奨学制度実施
報告を承認を以つて、議事を終了、石川副会長の
閉会の辞で総会は満ることなく終る。その後、懇
親会に入り、本校職員の酒井弘太郎先生編集の八
ミリ映画「続母校」を観賞した。学校の四季をと
り入れた見事な記録であつた。その後、懐しい恩
師を交え、総勢五十名余で歓談、盛会裡に散会し

八月二十日（土）午後二時より、岐阜市長良橋詰の「ホテルニューナガラカン」で開催、例年のチラシをやめ、ポスターとハガキの枚数を増加、総会の周知徹底を図り、多数の出席者を期待しました。当時は一御婦人の出席が多く、卒業年度のクラス会の感を呈する程でした。

についての議事、創立五十周年記念奨学制度実施報告を承認を以つて、議事を終了、石川副会長の閉会の辞で総会は満ることなく終る。その後、懇親会に入り、本校職員の酒井弘太郎先生編集の八ミリ映画「続母校」を観賞した。学校の四季をとり入れた見事な記録であつた。その後、懐しい恩師を交え、総勢五十名余で歓談、盛会裡に散会した。

岐阜県立本巣高等学校同窓会本部事務局

岐阜県本巣郡糸貫町仏生寺
郵便番号501-04 電話(0583)24-1201

母校の近況について

學校長 豊田義道

本校は創立以来はやくも五十七年、卒業生の数も実に一万六千名になんなんとし、これら数多くの先輩が県内は勿論全国いたるところで目覚ましい活躍をしておられますことは、母校に勤務している卒業生の一人としても本当に心強く喜ばしいかぎりであり、またご同慶に堪えないところであります。

本校は本年四月普通科八学級（三六八名）家政科二学級（九二名）と入学定員の変更があり、このことについて、一部家政科の将来を危惧する向きもあったようですが、これは他意ではなく、とくに家庭科を中心とする女子教育を、施設設備を十分活用してより一層充実した形で行うためのものであつたことをご理解願いたいと思います。

本校の現在の生徒数は千三百七十余名で、これらの生徒は恵まれた教育環境とすぐれた施設設備のもとで、各自の目的に向って勉学やスポーツに日夜真剣にとり組んでおります。

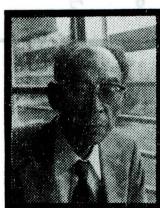
最近群衆の心が、いよいよ他の方面へ向かう傾向が見受けられます。この足らぬことが問題になつております。帰属意識は愛校心につながるものであり、生徒の生活全体に大きな影響を及ぼすものであります。この点本校は幸い単独選抜校であり、本巣高校生としての明白な帰属意識とともに自信と誇りを一段と高め、愛校心に燃え、輝かしい伝統の担い手にふさわしく立派に活躍いたしております。

に喜んでいたりしており、目に見えるかいの監査各位のご協力の賜と深く感謝している次第であります。

本校生徒は純真素朴にして質実剛健、しかかも真面目によく努力するという評価を各方面から受けていますが、ややもすれば根情と気迫に欠ける憾みなしといったしません。生徒の体位向上とともに積極性を養つて行くことが本校の重要な課題とも言えます。そういう意味からも、極めて至難のわざとされる学業と

これら先輩から寄せられた有形無形の財産を十二分に活用し、現状に甘んずることなく、母校の一層の発展を目指して頑張つてまいりたいと思いますので、今後とも会員皆様の一層のご支援ご鞭撻をお願いする次第であります。

同窓会だより



々長として十七年の
周年記念の大事業も
立派に完遂され、
県下一の環境のも
と、校庭の立派な
庭石も創立五十周
年に先生のお遊び
になった事を思い、
起すと、時の過ぎ

吉田健三先生を 偲んで

さる早さが身に感ぜられます。

和四十五年）創

先生には功なり名を遂げられ、新装北方病世の姿を知ることが出来たのもよい勉強の一つであつたと、同伴の私に申された事があります。

恩師計音
國島秀雄先生
一二年から三四年まで、一五年の長きにつ
本校七回卒業生で、昭和二

先生には功なり名を遂げられ、新装北方病院の開業を見てご逝去になりましたが、もうしばらく長生きして御指導を受けたく残念でなりません。

先生はまれに見る高潔な人格で、わが身の栄達より、ひたすら世のため身を犠牲にされたのであります。その信念は何ものもくつ

とともに、県地理学会の会長として本県教育の振興に大きな役割を演じられ、また本校同窓会の名簿作成にあたっては、その豊富な経

がえすことのできない、強い信念でありますた。

先生の偉大な業績に対し、深い感謝の意を
驗を生かして原稿の校正などに大きな貢献を
されました。

とが出来なくなりました。ああ誠におしむべ
くかなしみは、これにすぐるものはあります
ん。

ささげるとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

(副会長 八代春雄)

五〇%近くが大学進学を目指し、名実とともに、進学校としての色彩を強めてまいりました。とくに本年三月の卒業生の大学進学者の

スポーツの両立を本年度の教育目標にかかげ、これが実現に努力を傾けてまいりました。

加藤記念奨学会誕生

旧制本巣中学第一回卒業生の加藤利一氏から
らはかねて本校生徒の奨学について、群鶴文
文の推奨奨学金の給付など数多くのご援助を
いただいてきましたが、このたび永年勤続さ
れた川崎重工の副社長を退任されるにあた
り、母校に奨学財団の設立を思ひたれ、去
る七月奥様同伴で母校を訪ねられ、多額のご
寄附と授学のための財団を作つてほしい旨の
申し出がありました。

学校側では加藤氏のこの尊いお申し出に感激するとともに、その御意思を受けて、その後県との折衝や寄附行為の作成等その準備に取り組んできましたが、ようやく成案を得ましたので、去る十月二十八日本校校長室で加藤氏の出席も得て設立発起人会が開かれまし

た。その後細部の事務折衝を重ね、十二月上旬財團法人の認可申請、年内には県教委の認可がおりる運びとなりました。

この財團法人の実際の活動は昭和五十三年度からになりますが、その事業として、二十名近い高校生（月額五千円）大学生（月額一万円）に奨学金を支給することや、すぐれた研究をしている教職員に対する研究助成等、本校の教育振興に巾広く貢献する事業が計画されております。

現在県内の高校でこのようだ財團はよほど奨学事業が実施されているのは、岐阜・県岐阜の二校のみですが、本校がこれに続き、しかも内容が一段と充実した形で実施されるのは他校にその例を見ないところであり、加藤氏の暖い母校愛と教育に対する深いご理解の賜と関係者一同感激いたしております。

教職員や生徒一同、このあたたかい財團設立の趣旨を対し、覚悟を新たにして本校教育発展のため尽力することが望まれる次第であります。

なお財團の役員には次の方々が就任されました。

口からともなく話題になりました。

スクールカラーフ決まる

理常務理事長 井 豊 中 後 松 河 尾 藤 島 深 田 藤
監事 ククククククク
なお事務局は本巣高等學校

利 一 道 透 一 朗 郎 美 彦 岩 濟 おかれ おかれ に 内 秀 武 克 幸 周 義

の懇親会では心ゆくまで懐旧談に花が咲きました。それにもかかわらず同席の豊田も舌を巻いたほどであります。この上とも何時までも御健在で本校を見守っていただきたいものであります。

なお当日ご出席の先生方はつぎのとおりであります。敬称略、（ ）内はご勤務された年月

高橋	高倉	林坂	山田	安井	浅野
三	一	英	修	英一郎	信夫
三	英	(昭二〇・七)	次	(大四・三)	(昭六・三)
三	(昭一九・三)	(昭二四・三)	(昭九・六)	(大四・三)	(二四・五)
三	(昭一九・三)	(昭二四・三)	(三一・三)	(三一・三)	(二四・五)



写真前列右より

豊田 義道	矢野 静一	大塚 憲一	丹羽 偕郎
(校長)	(昭一七・三一九・一〇)	(昭一一・三一八・三)	(昭二四・一四・三)
黒田 秀雄	豊田 順次郎	黒田 順次郎	丹羽 偕郎
(昭一四・八一九・八)	(昭一七・三一〇・二)	(昭一七・三一〇・二)	(昭二四・一四・三)
写真なし			

現在校長室に大切に保管されている旧制中学校の校旗、旧制高等女学校の校旗（この校旗は戦後新制高校誕生後も若干改造して昭和四十五年まで校旗として使用されてきました。）も紫紺であり、さらに昭和四十五年創立五十周年を記念して作られた現在の校旗も紫紺であり、この色こそ本校のスクールカラ－として最もふさわしいものとして新しく決定というよりは、再確認し、生徒に喚起することとしたものであります。

紫紺はまことに気品高く、沈着冷静な中にも大きなファイトを秘めております。紫紺旗のもと全校生徒が覚悟を新たにし、大同団結して先輩の残された赫々たる遺産をさらに発展してくれることを只管願うとともに、先輩諸兄のご理解と、母校に対する一層のご叱声とご協力を願いする次第であります。

国語教科書の思い出

大塚憲

中学校へはいってわたしたちの使った国語の教科書は芳賀矢一博士編集の「帝国読本」というのだった。本文は今のような洋紙に活字印刷のもので変りはなかったが、造本は和綴であった。表紙の色は樺色で「帝国読本卷一」と題簽が貼ってあった。開巻第一は、「九十の春光」と題して、大町桂月の文章だった。春の三ヶ月を「九十の春」とはいかにもしゃれた言ひ方で、「新知識」——というには大きさだが——を得たような心のはずみを感じた。ついで、三春、九春などという語を知つたのもその時でなかつただろうか。夏服——六月一日から一齊に着かえた——になるまで和服でよかつた。当時の小学生は着物で洋服なぞ着ているものはなかつた。中学校は洋服を制服としたから、当然新調しなければならなかつたが、入学早々、何かと物入りたというので、洋服になるのは夏服からよかつたのである、そのかわり、袴をかならず着用させられた。登校する時はかりでなく、和服で外出する時はかならず袴をつけることになつていて、それを愈ると叱られたものである。帽子に校章を光らせ、袴着用の姿は、小学生から中学生への脱皮の姿だった。

「帝国読本」の表紙と「九十の春光」はあざやかに思い出すのだが、第二章、第三章などんな文がづいたのか全く思い出せない。「九十の春光」にしてからが、その内容にいたつては全く記憶がない。編者芳賀博士の文もその「国民性十論」か「雪月花」から抜粋されたものがあつたちがいないが覚えがない。だいたい、あのころの教科書は、生徒を漱石の「九十の春光」——といふ——を得たような心のはずみを感じた。ついで、三春、九春などといふ語を知つたのもその時でなかつただろうか。夏服——六月一日から一齊に着かえた——になるまで和服でよかつた。当時の小学生は着物で洋服を制服としたから、当然新調しなければならなかつたが、入学早々、何かと物入りたというので、洋服になるのは夏服からよかつたのである、そのかわり、袴をかならず着用させられた。登校する時はかりでなく、和服で外出する時はかならず袴をつけることになつていて、それを愈ると叱られたものである。帽子に校章を光らせ、袴着用の姿は、小学生から中学生への脱皮の姿だった。

「帝国読本」の表紙と「九十の春光」はあざやかに思い出すのだが、第二章、第三章などんな文がづいたのか全く思い出せない。

（五二・一二・一〇）

（筆者は本校第二回卒業生。昭一一一八

年、本校教諭、現岐阜女子大学勤務）

最後に、これは文学作品ではないが、丘浅次郎博士の「進化論講話」の一節が載せてあつたのが忘れられない。内容は全く思い出せ

ないけれど、行文流麗で、われわれにも分りやすく書いてあって心ひかれた。二、三年前

の「平凡」の一節、捨て犬を飼うところの話

あれも印象ぶかい。これが縁で、あとになつて「平凡」をむさぼり読んだこともなつかし

い思い出である。

（五二・一二・一〇）

（筆者は本校第二回卒業生。昭一一一八

年、本校教諭、現岐阜女子大学勤務）

第一回卒業生の戯言

林 弘 司

私は同窓会長井深透殿と同級生で古稀の翁です。昭和四十一年岐阜駅頭で発作で倒れた中風後遺症の老骨です。具体的なことを書くと手前味噌になるので抽象的になつて申訳ないが想うこと二三書かしてもららう。

我等の同級生は毎年必ず一回は会合をもつそのことによつてお互がたしかめ合い懐旧談に淡々として呵々大笑して親睦をふかめている。そこには何の遠慮もかけ引きも必要議決せねばならんようなむつかしいことも何もしない。いいことでないか。大いに各回の同級の会をおすすめする。引いては同窓会の発展にもつながるものと考える。

当時の自然のこととして、徳富芦花の文章がいくつか載っていた。「自然と人生」から鳥」を読みなおす余裕がない。

当時の自然のこととして、徳富芦花の文章がいくつか載っていた。「自然と人生」から鳥」を読みなおす余裕がない。

ある。その木がすでに丈余になつた。モハの声を思い出し、グライダー製作の熱心さにこん気と努力の心を学び、工作室の整理整頓に職（教員）の中で生かしメタセコイヤのある限り鹿島先生のお姿をしのびます。

× × × × ×

教養と云うこと、今の若い人々は「そんなことして何になる」とすぐに批判的に事をかたつけてしまうようだ。

自転車（人生と云う）が通るに必要な最小限の道と云えばタイヤの巾だけでよいと極限できる。然しあなたが安心して鼻歌の一つも

出して乗つて行けるためには二m、三mの道巾が望ましい。その道巾をいくることこそ教養なのである。本を読むもよし、習事をするもよし、人の話をきくもよし、旅行をして色々と見歩くもよし、兎に角すぐ功利主義狭道に走らず、豊かに奥行きのある親しみ易い楽しみ多い人生を自ら創つて行きたいもので

す。

一本の松木でもそれがすぐ柱になるか杭になるかと吟味される松の木でなく、庭園の石により添つて立つ松の木のように、その庭からその木を取り除くと庭（社会）の全体が美をなくし必要欠くべからずの感を深くするような人生を過そうではないか。

大らかに豊かに、すなおに、楽しくよく

よせずせめても心の中にうるおいと親切さをなくさないようにしたいのです。

「本校所蔵の甲冑は 県下屈指の名品」

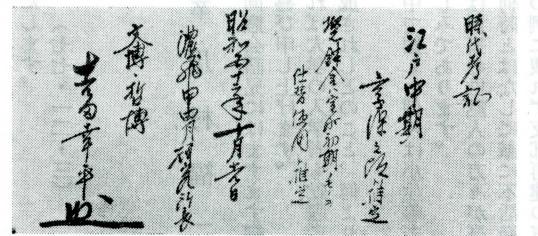
(県立博物館鑑定)
県下屈指の名品

昭和のはじめから本校に所蔵されていた甲冑が、このほど岐阜県立博物館の調査鑑定の結果、県下屈指の名品であるとの折り紙がつけられました。

この甲冑は、昭和初年に本巣町在住の故人戸田水脈三郎氏(昭和二十七年卒、則秋氏の祖父)から寄贈されたもので、戦前は地歴準備室に、戦中の一時疎開をへて戦後は校長室に飾られていきました。卒業生の皆さんにはおそらくなじみの深いものであります。

さる十月、県立博物館(関市、松尾克美館長)から「ぜひ調査させてほしい」との要請があり、甲冑研究家の吉田幸平氏をはじめ館員三名が来校され、綿密な調査がおこなわれました。その結果は、別掲「鑑定目録」のとおりですが、製作年代は江戸中期(享保年間)と推定され、とくに兜鉢金は室町初期にかかるとのことで、鑑定に当られた吉田氏も「このような古いものがほとんど完全な姿で保管されている例は、きわめて珍しい」と感嘆されていました。

その後、同博物館による甲冑調査が県下



円にわたって進められていますが、「本巣高校所蔵の甲冑は、県下の甲冑の中でも指折りの名品である」と、高い評価を受けております。このような貴重な品をお贈りいただいた戸田氏にあらためて感謝申しあげるとともに、六十年の伝統を誇る本校にふさわしいこの「名品」を本校の宝として、いつまでも大切に保存していきたいものです。

内に立掌一段(一寸四枚半)、子口(子口)付
本小札鉄革三枚之一枚
縄糸締濃威
採拌環付

乳呑環付
上総環付
鳩尾板せん
檀板付

面頬(メンボウ)
鉛地
目之下頬当

草摺八間五段下り
垂
三段下り
縄糸締濃威

袖大袖七段下り一寸四枚半
水呑環付
冠板牡丹ニ唐獅子文様

黒塗三枚小手
佩楯ハイダテ
伊予佩楯

轔当スネアテ
三本筒轔当加古摺付
植毛コウガケ付

丁巳師走記晴歩雨宅の古稀翁
波弥史
日呂志。

吉田文庫設立

同窓会会長として、校医として長年本校発展に貢献した故吉田健三氏のご遺族から「故人の遺志」として本校に金一封が贈呈されました。学校ではご遺族ともご相談の上、在校生の勉学の資とすべく、医学、保健、体育関係の書籍を集め「吉田文庫」を設立いたしました。

つづしんで故吉田先生のご冥福をお祈り申しあげるとともに、母校に寄せられたご厚志に、心から感謝申しあげます。

「揖斐郡教職員の会」 本年度総会は1月21日

本校卒業生で、揖斐郡に在住し、または揖斐郡内学校に勤務する教職員でつくっている「揖斐郡教職員の会」(六面紹介)の本年度総会は、1月21日午後三時半、大野町黒野、魚千代で開かれる予定。関係者多数のご参加が期待されています。

応援部コンテストに出場

岐阜放送主催の「高校応援コンテスト」に本校応援部の出場がきまりました。これは、岐阜地区的高校十数校が参加、伝統的応援ぶりを競演するもので、今応援部は、先輩の名を汚さぬよう、猛練習中。放映は1月3日、午後1時から、一時間半岐阜テレビで。ぜひご視聴ください。

(四面つづき)
私の最近の悟(?)は老人となつて次のようになる。
「恍惚は病に非ずその人の生活態度からくる現象なり」……。

よつて
道楽よし趣味よし読書よし絵、音楽よし釣りよし遊びよし旅行よし。etc
毎日を新しく望みと計画をつねにもちつづけて長生の道を自らひらかん哉である。
愚見愚考を拙文した老人の戯言とおゆる下さい。

日呂志。

